

1876年(明治9年)札幌農学校(現北海道大学)が開校しました。水産学はこの時点で、日本が手本とした欧米の大学においても学問として体系化されていませんでした。開校まもない1880年(明治13年)には、外国人教師ジョン・C・カッター博士が動物学の授業で水産学に関する講義を行っており、これが我が国における水産学教育の始まりとされています。多くの自然科学が欧米を手本として発展したのとは異なり、水産学は自然科学の中で、唯一我が国に起源を持つ学問であり、北海道大学で生まれ、育ち、科学として確立した学問です。もちろん、初代教頭のウイリアム・S・クラーク博士や外国人教師が、北海道の広大で豊かな自然と水産資源に期待を持っていたことも展開できた大きな要因です。

水産学の流れは、札幌農学校一期生で、後に千歳に道立のサケマス孵化場を開いた伊藤一隆、北海道沿岸のコンブ類の研究を行った二期生宮部金吾、そして「漁業も亦学問の一つ也」と卒業演説を行った同じ二期生の水産学者で思想家内村鑑三ら学生に引き継がれていきました。いずれも水産、教育や人材育成等未開の分野を大いなる可能性と捉え、世界を広げ、水産学の体系化に尽力しました。1907年(明治40年)に札幌農学校に、水産教育を体系的に行う「水産学科」が設立されてから水産学部は、2021年で創設114年を迎え、これまで約20,000人の優れた人材を輩出し、同窓生は海洋・水産関連分野を始め広範な分野で、産業と科学の発展に貢献しています。

現在の水産学部は、札幌農学校の精神を色濃く受け継ぐ学部と言われています。北海道大学は、開学以来「フロンティア精神」、「国際性の涵養」、「全人教育」、そして「実学の重視」の基本理念の元、教育を培って来ました。1876年(明治9年)、札幌農学校開校式において、クラーク博士は、「Lofty Ambition! 高邁なる大志」をもって毅然として新しい道を切り拓いて生きることを示されました。北海道大学の基本理念の一つ「フロンティア精神」の起源です。新たに発生する大きな課題に対し、常に豊かな創造性を持って不断に研究を推進することを示したもので、常に厳しい海洋環境と対峙し水産学の確立と発展のため研鑽を積んできた私たちの基本理念です。あわせて、産業への還元を念頭に研究を進める「実学の重視」を念頭に置いた教育が実践されています。

現在水産学部では、水圏生物資源をベースに持続的生産、環境保全、そして総合的な利用など、様々な科学的発見を通して、人類社会へ貢献することを教育目標にしています。さらに、大学院水産科学院では、「海洋・水圏における生物資源の持続的生産」と「それらの効率的利用」、さらに「海洋生態系や環境の保全」を対象に、そこで発生する課題に対し総合的



大学院水産科学研究院長  
木村 暢夫 (KIMURA Nobuo)

に解決できる能力を身につけることを教育目的として掲げております。そして、水産科学は、地球環境や資源、特に水圏における生物資源の再生産から利用までの過程を一つのシステムとして捉え管理することで持続的に利用することが可能であるという観点に立った「持続可能性水産科学」を掲げて教育・研究を行っています。

近年、マイクロプラスチックの例に見られるように、海洋に廃棄される人為活動による産業廃棄物による汚染は、海洋の生態系に影響を与えるとともに、私たちの健康そのものにも無関係ではない状況となっています。また、私たちが利用してきた水産資源の多くは過剰漁獲と環境変動により激減しており、資源維持と再生は危機的状況にあります。しかし、一方で世界における水産物の需要増加は続いており、欧州各国、中国をはじめ多くの地域では漁業・養殖業の拡大は続いています。こうした中、2015年の国連サミットにおいて17の目標を定めた「持続可能な開発のための2030アジェンダ」が採択され、持続可能な開発目標(SDGs)が示されました。その14番目の目標として「海洋と海洋資源を持続可能な開発に向けて保全し持続可能な形で利用する」ことが謳われています。

今、まさに私たちは「持続可能性水産科学」を実践して、海と資源そして私たちの健康を守っていくための道程を示して行かなければなりません。海に負担をかけない漁業・養殖技術の確立、効果的な海洋環境の修復技術や資源の管理法、水産物における未利用の機能性の発見や利用法など、解決しなければならない課題は数多くあります。そのために必要な水産科学のパラダイムシフト、そして技術のブレークスルーは、皆さんの柔軟で自由な発想から生まれるのかもしれない。是非、皆さんが取り組む研究から新たなシーズを社会そして世界へ発信して下さい。

